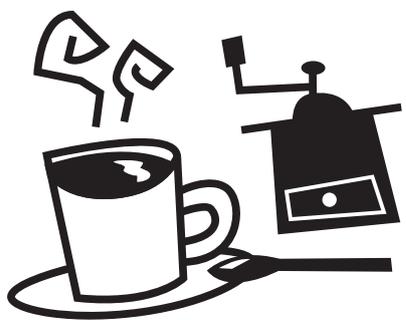


喫茶店に7

萩原

朔太郎



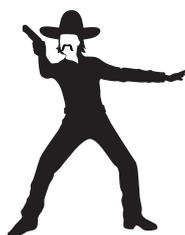
藍岩堂



喫茶店にて



藍岩堂



喫茶店にて

萩原 朔太郎

先日大阪の知人が訪ねて来たので、銀座の相当な喫茶店へ案内した。学生のすくない大阪には、本格的の喫茶店がなく、珍らしい土産話と思つたからである。はたして知人は珍らしがり、次のような感想を述べた。先程から観察していると、僅か一杯の紅茶を飲んで、半時間もぼんやり座つてる人が沢山いる。一体彼等は何を考えているのだろうと。一分間の閑も惜しく、タイムイズマネーで忙がしく市中を馳け回つてる大阪人が、こうした東京の喫茶店風景を見て、いかにも閑人の寄り集りのように思い、むしろ不可思議に思うのは当然である。私もそう言われて、初めて喫茶店の客が「何を考えているのだろう」と考えて見た。おそらく彼等は、何も考えてはいないのだろう。と言つて疲労を休める為に、休息しているというわけでもない。つまり彼等は、綺麗な小娘や善い音楽を背景にして、都会生活の気分や閑散を楽しんでるのだ。これが即ち文化の余裕というものであり、昔の日本の江戸や、今のフランスのパリなどで、この種の閑人倶楽部が市中の至る所に設備されてるのは、文化が長い伝統によつて、余裕性を多分にもつてる証左である。

武林無想庵たけやしむそうあん氏の話によると、この余裕性をもたない都市は、世界で紐育ニューヨークと東京だけだそうだが、それでもまだ喫茶店があるだけ、東京の方が大阪よりましかも知れない。ニイチエの説によると、絶えず働くと言ふことは、賤いやしく俗悪の趣味であり、人に文化的情操のない証左であるが、今の日本のような新開国では、絶えず働くことが強要され、到底閑散の気分などは楽しめない。パリの喫茶店で、街路にマロニエの葉の散るのを眺めながら、一杯の葡萄酒で半日も暮しているなんてことは、話に聞くだけでも贅沢至極のことである。昔の江戸時代の日本人は、理髪店で浮世話

や将棋をしながら、殆んど丸一日を暮していた。文化の伝統が古くなるほど、人の心に余裕が生まれ、生活がのんびりとして暮しよくなる。それが即ち「太平の世」というものである。今の日本は、太平の世を去る事あまりに遠い。昔の江戸時代には帰らないでも、せめてパリかロンドン位の程度にまで、余裕のある閑散の生活環境を作りたい。



喫茶店にて

平成二十三年五月二十日 初版

著者 萩原 朔太郎

発行所 藍岩堂